



高木仁三郎市民科学基金の助成を受けて2021年8月から2022年7月に行われた、「東京外環道大深度地下トンネル工事の振動・低周波音被害」についての第Ⅰ期調査の動画や報告文書を、市民研のウェブサイトでまとめて公開している。第Ⅱ期調査もすでに始まっている。



Information

9/24(土)、9/26(月)、10/24(月)に
アーカイブ研究会の報告会

この2年ほど、市民研理事でもある瀬野豪志さんを中心に数名のメンバーで定例的な活動を続けてきた「アーカイブ研究会」から、調べたり議論したりしてきたことの一部を共有する機会を設けます。

●9月24日(土)17時～ 公開学習会「音楽アーカイブズ研究とは」(仮題)

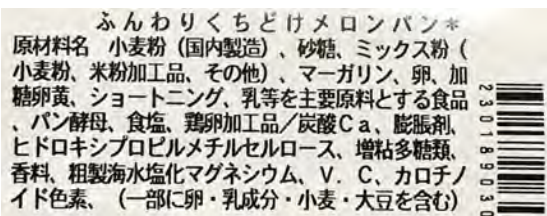
大学院で主に音楽家の残した資料群(アーカイブズ)の研究をすすめる那須聡子さんがこの7月にプラハで開かれた国際会議で行った発表のことなどを報告します。市民研事務所で軽食をとりながら、自由な議論の機会になります。参加希望者は事前に市民研にメールでご連絡ください。

●10月24日(月)19時～ 市民科学入門講座「音楽アーカイブズ研究とは」(仮題)

上記の那須さんの発表を軸に、瀬野さんからも「アーカイブ学」の諸問題を論じてもらいます。こちらはオンラインでの講座です。市民研ウェブサイトの申込みフォームからお願いします。

●9月26日(月)19時～ 市民科学入門講座「これはパンなのかパンモドキなのか」

瀬野さんが随時買い集めて研究会で披露してくれた「もちもち」「しっとり」……のパンのニューフェイスたち。市民研代表の上田はその食感や味を体験させてもらいながら、奇妙な添加物のオンパレードを目にすることとなりました。この講座では、「この添加物を入れるわけ」をどこまで解き明かせるかの報告です。こちらでもオンラインの講座となります。



Information

「めざせ、子どもシェフ！」

9月のテーマは「発酵」と「稲刈り体験」

公益財団法人キュービーみらいたまご財団の2022年度「食育活動助成プログラム」の助成を受けて5月からスタートした「めざせ、子どもシェフ!一食と農のとびっきり体験」。自炊力を養う「身につけよう!キッチンサイエンス」、大都会でどのような農業がなされているかを見学する「訪ねてみよう!都会の農家さん」のそれぞれの講座を毎月1回ずつ入れています。

これまでの講座の報告は、共催団体であるNPO法人ポラン広場東京のウェブサイトに掲載しています。2022年9月は次の2つの講座を実施します。

●キッチンサイエンス 第5回 「麴(こうじ)の力 発酵の力」

9月11日(日)午前10時から、立川女性総合センター アイム料理実習室にて

●農家さん訪問 第5回 「稲刈り体験してみよう!」

9月25日(日)山梨県北杜市・みんなのおうち公園の田んぼを訪ねる

受講生は小学校5年生から高校3年生までの20名です。まだ若干余裕がありますので、ご関心のある方はぜひ子どもさんに声がけなさってみてはいかがでしょうか。

お申し込みとお問い合わせは、以下にお願いします。

NPO法人ポラン広場東京 事務局(担当:中村)
0428-22-6821(受付時間平日09:00~17:00)
office@polano.org



Information

市民研の動画シリーズ「ブックトーク 語っていいとも」
をご覧ください

市民研はコロナ禍のもと、それまでもっぱら事務所やイベント会場で行っていた講座や会合を、ほとんどすべてオンラインで実施するようになりました。そればかりか、オンラインの手軽さをフル活用して、新たな企画も次々立ち上げてきました。そのなかで、オンラインと事務所参集を使い分けながら続けているヒット企画がシリーズ「語っていいとも」です。

市民研の動画サイトである「くらしとかがくのアーカイブ」にアクセスしていたければ、そこに現時点で11名の方々(すべて市民研の会員の方々)の動画がご覧になれます。

1冊の本をめぐる、興味深い話題が次々と繰り出させる、大変見ごたえのあるシリーズになっていると思います。ぜひご覧ください。



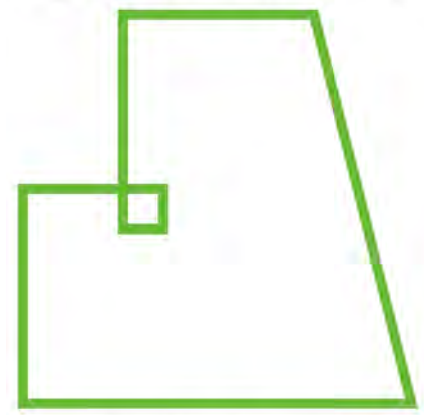
Information

小石川植物祭で(株)THDと市民研が共同で
園内GPS音声ガイドを披露

「植物園が街の庭に、街が植物園の分園へ。新たな循環が街の個性となることを願う人たちの祭り。」をコンセプトに、2022年10月21日(金)~23日(日)に東京都文京区にある小石川植物園で初開催される「小石川植物祭」。もうすぐ公式のウェブサイトが立ち上げられますので詳細はそちらをご覧くださいと思いますが、市民科学研究室と(株)THDは共同で、東京大学大学院理学系研究科の先生方や園のスタッフの皆さん—小石川植物園はその研究科の附属施設です—にもご協力いただきながら、園内の植物、園の歴史、園での植物研究の様子……などを、音声ガイドで案内できるシステムを、今回の植物祭で披露することになります。これは、GPS位置情報を使って訪問者を誘導しながらその場その場で自動再生されるもので、専門家による解説が実際の植物や施設を巡りながら聞くことができます。ご期待ください。



街が植物園へやっできて、
植物園が街へ広がっていく。



小石川植物祭
Koishikawa Botanical Festival

市民研へのご入会／ご寄付のご案内

市民研の活動は会員となつてくださる方々の会費やご寄付によって支えられています。

市民研の活動にご賛同いただける方、支援をしていただける方には、ご入会やご寄付をお願いいたします。

ご送金・ご入会・ご寄付につきましては以下のやり方をお願いしています。

●100円単位の送金 100円単位のカンパや少額の送金(郵送料など)にご利用ください。

市民科学研究室の新しいウェブサイトのメインメニューに「ご支援のお願い」があります。そこから「市民研オンラインショップ」のサイトに繋がります。そのなかに、「一口100円ご送金」のカードがありますので、ご利用ください。

●会員登録 年会費を送金して次のいずれかの会員になることができます。

★正会員(レイチェル会員)………年会費 10,000円(議決権、動画見放題、参加費無料)

★賛助会員Ⅰ(ファール会員)………年会費 5,000円(動画見放題、参加費無料)

★賛助会員Ⅱ(ダーウィン会員)………年会費 3,000円(参加費無料)

会員になると、以下のサービスを受けることができます。

1. 隔月の機関誌「市民研通信」の送付(会員は全文アクセス可、非会員には有料の記事論文あり)
2. 市民研メーリングリストへの全会員の登録
3. 市民研の各種研究会への参加(オンラインでの参加はすべての会員は無料)
4. 市民研のイベント動画がいつでもどこでも見放題(レイチェル会員とファール会員のみ)
5. 市民研が刊行した出版物の寄贈(レイチェル会員のみ)
6. 市民研主催の市民科学講座・各種イベント・研究会での配布資料、市民研の代表や理事メンバーらが講師として招かれた講演などの配布資料のうち、公開可能なものから精選して送付
7. 市民科学研究所蔵の書籍・文献資料や映像資料の借り出し(期限1ヶ月)

●ご寄付 一口1,000円から受け付けております。ご送金の方法は以下のいずれかをお願い致します。

郵便振替用紙にて……口座加入者名:市民科学 振替口座番号:00160-4-608503

クレジットカード決済……市民研サイトのオンラインのカートより(「ご寄付・ご支援」コーナー)

お持ちの銀行口座から……「ゆうちょ銀行」支店名:〇一九 口座番号:608503 宛に

NPO法人 市民科学研究室 〒113-0034 東京都文京区湯島 2-14-9 角田ビル2F
Tel: 03-5834-8328 Email: renraku@shiminkagaku.org

Article 瀬野豪志（NPO 法人市民科学研究室理事＆アーカイブ研究会世話人）

【連載】美味しい理由―「味の素」の科学技術史 第6回

新しい「味」の先に起きていく出来事

誰もわからない、新しい食品の使い方

一般の家庭で「味の素」が普及したのは、銘々膳からちゃぶ台へと移りつつあった明治末から大正時代のことであるが、どんな食物にも多量に振りかけてしまうような、乱暴で過剰な使い方が生じやすかった。「味の素」の製造と販売を始めた鈴木商店の社史によれば、初めて「味の素」を使おうとしたときの家庭での反応は、次のようであった。

これまで類例のない、性質も用途用法も、使用分量さえも全く知られていない新商品を紹介するのだから、何から何まで宣伝して行かねばならぬ。殊に味の素は極めて少量で、効目があるのだから、これを試味する場合には、吸物をつくるとか、湯水に適当にのばして味わうとかすべきであるのに、大抵の人はいきなり口中へ投げ込んで嘗め試みるために、量が多過ぎて甚だ執拗いので、却って厭になる事がある。又吸物その他の料理に使うにしても、往々使用量をすこして味があくどくなり、一編で懲り人が多い。

「味の素」が販売されて5、6年ほど経った大正の初期でも、「ある家庭で初めて味の素を買い、その使用法の説明書も読まずに豆腐の汁の中へ中瓶一本（吸物にして約百五十人前の量）を投入して、あんなまずい高いダシはない」という文句を言う人がいたという。家庭で「味の素」を初めて使うときは、その「効果」を確かめようとするあまり、多量に使ってしまう失敗が起きやすかったのかもしれない。……

【続きは市民研HPにて】

Information

三河内 彰子（市民研・理事）

市民科学研究室 公開講座報告 後編
見る目が変わるミュージアムの楽しみ方シリーズ第4弾
「博物館活動への市民参画：植物標本デジタルアーカイブプロジェクトの推進力として」

◆実施要領◆

場所：東京大学総合研究博物館ハーバリウム（現地参加とオンライン配信）

日時：3月13日（日）13:30～15:00 （現場では13:15-16:00）

◆講師◆

池田博 （東京大学総合研究博物館 准教授）

三河内彰子 （市民科学研究室 理事、明治学院大学言語文化研究所 研究員

東京大学総合研究博物館 研究事業協力者）

本報告は『市民研通信』第66号に掲載した公開講座報告の後編です。今回は講座の中盤以降の実践、つまり、押し葉標本作成と新設スタジオでの標本撮影から続けます。その様子は市民研のアーカイブ研究会によってZoomで配信され、オンライン参加者がリアルタイムで画面越しに追体験し、随時双方向で質問やコメントができました。この方法が予想以上にうまく皆の知的好奇心をくすぐることとなりました。

例えば、参加者の寺山さんと山本さんが台紙のどこに標本を置か迷っていると、大学生サポーターの高橋さんや池田先生が手取り足取りサポートし、先生と私でその意図や目的などを解説するといった調子です。その際、研究者は採集時に既に標本の台紙の大きさを予想し、標本になった時に重要な部分がきちんと見えるように植物を採集してきているなど、専門家の見る目やハーバリウムに蓄積された知や技術が紐解かれることとなりました。

デジタルアーカイブの公開にあたっては、アーカイブの存在がミュージアムと社会にとって意義深いものになるための提案として、参加者各々の背景から具体的なヒントが寄せられ、市民研らしい会となりました。詳細を以下で紹介します。

【続きは市民研HPにて】



Article

山根伸洋（市民科学研究室会員）

【連載】開発主義政治再考 第7回

補論／『現代技術評論』の二年間

0) はじめに 戦間期から戦時期における日常

書き手の私的事情を詳らかにすることは、書いた文章に対する不出来や不足の「言い訳」をあらかじめ用意するようで潔くないと思う。けれども今年は自分の出身校である東京工業大学に関連する人物、川崎市（1908～1987）についての報告を行う機会を得た。その報告の準備から報告までの経過の中で、改めて戦間期から戦時期にかけての科学技術動員体制の中で、技術者養成の高等教育機関の整備の実況について振り返る機会を得た。そこで、各人の生年が極めて重要であることを確認した。育ち学び活動した時代によって人の生きざまは大きく変わる。アセチレン化学・石炭化学工業に育った川崎市は、戦後自らの決断をもって日本の重化学工業を石油化学工業へ転換し、全国の拠点産業都市へ石油化学コンビナートを配置する国土政策の立案・実施の先鞭をつけた。その川崎市は、鳥取県の山林にてたたら製鉄を生業とする近藤寿一郎に育てられた。1900年代初頭から10年代に生まれた世代は、近世期以来の第一次産業に振り分けられる地域の生業の営為の中に、そしてその生々しい記憶の中に育っている。

『現代技術評論』の主要な書き手であった山崎俊雄（1916～1994）もまた戦前に東京工業大学を卒業している。木本（1994）では山崎のたどった技術史家としての足跡を丁寧に拾い上げているが、山崎が入学した1937年にはまだ「のびのびした自由な空気」があったとの山崎自身の述懐が紹介されている。戦間期から戦時期にかけて構想された技術者養成のための高等教育機関における学風が、どのようなものとして設定されたのか、そこにおける学風は自生的に育っていったものなのか、それともある種の規範的骨格の強制があったのか、戦時動員体制と学術振興政策との関連については実に生々しい今日的課題でもある。……



【続きは市民研HPにて】

Article

林 浩二（千葉県立中央博物館）

【連載】博物館と社会を考える 第13回

国際博物館会議（ICOM）の博物館定義の改定（速報）

1. はじめに

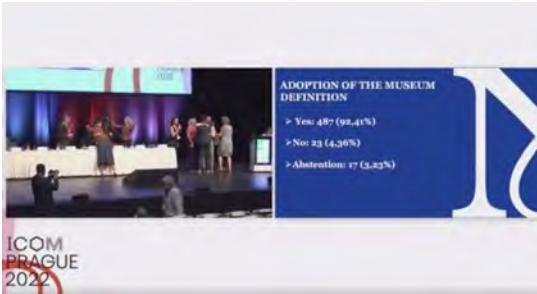
チェコ共和国・プラハで開催されていた国際博物館会議（ICOM）の第26回大会のうち2022年8月24日午後（日本時間では24日夜）に開かれた臨時総会で、圧倒的多数をもってICOM規約内の博物館の「新しい定義」が採択されました。今回はこの定義の誕生を速報として報告します。

京都で開催されたICOM第25回大会（2019）での採択をめざして改定案が準備され、大会最終日の臨時総会に上程されたものの、採決を延期することとなった経緯については、連載第10回「京都で開催された国際博物館会議ICOM大会」（2019年10月）で速報しました。また、京都大会以後、2022年4月までの定義改定の経過については連載第12回「国際博物館会議（ICOM）の博物館定義の改定と博物館法の一部改正」（2022年4月）で紹介しました。適宜、参照いただければ幸いです。

また、ICOM京都大会での定義改定の議論については、青木加苗(2020)、五月女賢司(2020a)・(2020b)、松田陽(2020) などが参考になります。

2. ICOM Define常置委員会によるconsultation

ICOM京都大会（2019）での採択に向けて、博物館定義改定案の準備の中心となったのは、連載10で紹介したように、MDPP常置委員会でした。……



【続きは市民研HPにて】

Article 中田哲也（ウェブサイト「フード・マイレージ資料室」主宰）

「食と農の市民談話会」を振り返って

現在の日本の食と農は、国内供給力のぜい弱化や食品ロス的大量発生など多くの深刻な課題を抱えている。

これらの背景には、食(食卓)と農(生産現場)との間の距離が離れてしまっていることがある。産地や生産者の姿が見えなくなった消費者にとって、今や食べものは単にお金を出せば買える「商品」に成り下がってしまった結果、食べものを大切にし、生産者を敬い、さらには食べものをもたらしける自然や環境を畏敬する気持ちが失われつつある。

課題解決のためには、今や圧倒的大多数となった都市に住む消費者が、食や農に関わる問題を「自分ゴト」として捉えられるようになることが必要である。つまり離れてしまった食と農の間の距離を再び縮めることが必要であり、そのためには、消費者と生産者相互の「顔の見える関係づくり」（信頼関係の醸成）が有効であると考えられる。

「食と農の市民談話会」（以下、「談話会」という。）の開催は、そのきっかけづくりのための一つの試みであった。以下、その概要について、反省点も含めて整理しておきたい。

1 開催の概要

談話会は、2021年6月から22年3月の間、毎月1回（火曜日の19時から）、全9回にわたって開催した（なお、2022年12月には番外編として「放談会」を開催）。毎回、ボランティアでお願いした講師の方から話題提供を頂き、それをもとに参加者との間で質疑応答・意見交換を行った。

開催はオンライン（zoom）により行い、市民研正会員を除いて有料（500円／回）であったが、講師が魅力的な方ばかりであったこともあり、毎回、20名を超える方に参加頂いた。……



【続きは市民研HPにて】

Article

桑垣 豊（市民科学研究室・特任研究員）

【連載】21世紀にふさわしい経済学を求めて 第17回

第11章 経済活動の起源

考古学の進歩により、文書に残っていない時代の経済活動の実態が見えてきました。一部歴史学（文字資料）の成果もとりいれつつ、経済活動の起源にせまります。日本の例を中心に中国、インド、メソポタミアにもふれます。

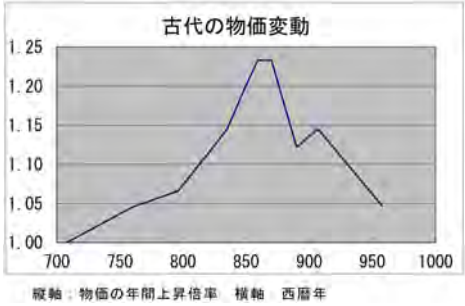
状況証拠しかない場合も多いですが、旧石器時代の流通網の可能性や、縄文時代の交換、弥生時代の加工業、古墳時代の布や米などの実物貨幣、飛鳥時代の貨幣発行政策などが、明らかにしつつあります。

日本の後期旧石器時代後半(2万9千年前～1万数千年前)には、長野県の高原地帯（鷹山遺跡など）で、黒曜石から石器をつくる専門集団が生まれています。石器と食料を交換していた可能性が高いでしょう。移住生活をしていたため、流通網はほとんどなかったようですが、市場の芽生えが見えます。伊豆諸島の神津島へは遠洋航海によって、黒曜石採取にたびたび赴いていたことから、なんらかの流通網の存在もうかがえます。

縄文時代は定住が進んだため、黒曜石や塩など供給源が限られるものは、流通網を必要としました。新潟県糸魚川産のヒスイは、広域流通していました。

弥生時代から飛鳥時代後半の富本銭（銅銭）と無紋銀銭発行までは、布や米などの実物貨幣が交換の媒体も兼ねていました。万葉集から、交換の場であった市のようなうかがえますが、本格的に米作が始まった弥生時代にさかのぼるでしょう。それは同時に豊作のときの余剰米発生と貨幣化が関連し、需要不足の起源につながります。実物貨幣の存在は、少なくとも古墳時代には、さかのぼれるそうです。

7世紀末の藤原京（新益京：あらましのみやこ）以後は、都に官営市ができました。平城京では、東西それぞれ市司（いちのつかさ）という役職の元に価長（かちょう）を置き、物価調査官5名を任命していたことがわかっています。価格は、公定価格、半公定価格（沽価：こか）、自由価格の3つに分かれていました。物価調査結果に基づいて、沽価の水準を決めていたようです。……



【続きは市民研HPにて】